

### 第三章



サヤが去ったあと、トヨはずっと黙っていた。  
三人の女たちはひたすら無言で歩いた。日が昇り、日が沈み、三日間、歩いたが山道は続いた。  
人とすれ違うこともなかった。  
四日目の夕暮れ、山を下って小さな盆地に出た。わずかな田畑が開かれ、二軒の藁葺きの家が  
見えた。  
人影はなかった。竪穴式の家は荒れ果てていた。田畑にも雑草が生い茂っていた。

「この里も、ヒミコに滅ぼされたのか」  
マユワが呟いた。アユメは答えなかった。  
三人は、一つの家に入った。食べられそうなものは何一つなかった。この三日、三人は、草の  
根だけを齧って飢えを凌いでいた。三人は、土の土間に疲れ切った軀を横たえた。

「狗奴の王女よ」

アユメが重い口を開いた。

「あと二日歩けば邪馬台に着く」

トヨの眼が光った。だが、その光はすぐに弱々しく消えた。

「邪馬台に着いたら、どうする」

「手形を使って王都の内部に入る」

「入ってどうする。吾等は飢えている。戦えない」

アユメは試すように問うた。マユワが思わず、アユメの肩に手をかけた。それほど、アユメの  
眼には鋭い光が宿り、口調はただならぬ気配を帯びていた。

トヨは、アユメを見ず、静かに答えた。

「吾等三人で邪馬台の兵百人とは戦えぬ。サヤの言ったとおり、無駄に血を流すだけだ」

アユメとマユワは、トヨを見つめた。うちひしがれていたような表情は消えていた。サヤと別  
れて以来、トヨは何も言わなかったが、サヤが言い捨てていった言葉の意味を反芻し、必死で考

えを纏めていたことが伺えた。

トヨは続けた。

「いづれ邪馬台に滅ぼされたクニの人々を集め、大軍を興して邪馬台を攻める。そのときのために、兵の位置、柵の並べ方、王宮への通路を確かめておく」

「しかし、王都の内に入れるか」

マユワが口を挟んだ。

「手形はあるが、武装したままでは怪しまれる」

「吾は末羅の王女になる」

トヨは微笑んだ。

「末羅の騎馬隊は全滅した。末羅から邪馬台に知らせが届くまでに、吾等は邪馬台に着くであろう。どこかの辻で、布を手に入れ、末羅の王女らしく装う。汝等は、末羅の王女を護衛する女兵になれ」

一つ山を越えると、そこに「辻」があり、市が開かれていた。

トヨたちは、白布を手に入れた。「辻」には布を縫う織女もいた。袖のついた上衣に、襷のあがる長いスカート、銀の輪を繋げて帯とした。

「アユメ、マユワ。吾は末羅の王女に見えるか」

辻に近い森に入り、せせらぎで泥塵を洗い流し、衣装を着けおわったトヨは、美貌や気高い物腰とあいまって、元の王女らしくなった。アユメとマユワは、ともに頷いた。

末羅の王女になりました一行は、「辻」を離れ、邪馬台へと歩き出した。

途中、小さな里があった。田で畝を打っていた農民が三人、道に上がり、一行に瓶を差し出し、平身低頭した。

アユメがトヨに耳打ちした。

「彼等は、トヨを王女と見た」

邪馬台の周辺地域では身分の差が厳しい。王族や王宮に仕える貴族は「大人」とされ、他は「小人」と呼ばれる。「小人」は、「大人」を見れば、地に跪き、叩頭しなければならぬ。

「小人」たちは、瓶を地に置くと、土下座したままそろそろと後ろにさがった。アユメは瓶をのぞいた。酒がたたえられている。傍らに木の杯が三つ、置かれている。アユメは微笑んだ。

「この酒は吾等への献上品である」

献上された酒は、その場で一口飲み、去ってゆく。それが作法である。三人は、杯で酒をすくい、飲み干し、再び歩き出した。

しばらく歩き、突然三人とも目眩を覚えた。さらに激しい嘔吐がこみあげてきた。脚の感覚が消え、さらに意識が薄れていった。

気がつくくと、三人は手足を縛られ、荷車に揺られていた。

荷車を二人の兵が引いていた。その後ろに、剣を帯びた男が歩いていった。さきほどの農民の一人だった。トヨは怒鳴った。

「汝等、何をするか。吾は末羅の王女である。ヒミコ様からいただいた手形もある」

男は哄笑した。

「愚かな女どもよ。汝等が辻で布を得、森の中で衣装を替えるのを吾はずっと見ていた。末羅の王女に化け、何をする気でいたのか」

アユメとマユワは歯噛みした。だが、トヨはすぐに怒りを鎮め、問うた。

「汝は邪馬台の者か」

「吾はウカシ（宇鹿志）。ヒミコ様の命で、美しい女の生口を集めている。汝等は、ヒミコ様が催される宴で、海の彼方のクニグニの王族に売られる。彼等は、汝等の代価として、多くの財宝をヒミコ様に献じる。海の彼方のクニにて、王族の側女として贅沢に暮らせる」

農民に化けた奴隷狩りの連中に、痺れ菓の入った酒を飲まされ、奴隷として他国の王族への土産として渡されるのだ。

縛られた軀を激しく揺すり、何かを叫ぼうとしたアユメを、トヨはそっと抑えて囁いた。

「吾は諦めない」

「しかし」

「吾等は邪馬台に入ることができる。たとえ海の彼方に売られても、また戻る。ヒミコを滅ぼす」

当時の大陸の観察者は、邪馬台国を「女王之都」と記録している。広く開けた平地に城柵に囲まれた「女王の都」は、ヒミコの住まう王宮と、ヒミコに使える王族・貴族・神官たちの邸、米や食糧、財宝を蓄える倉、祭事を行う広場などからなっていた。一般の民びとが、柵のうちに入ることは許されない。彼等がヒミコを見ることができるとは、馬にまたがったヒミコが兵を引き連れ、他のクニを征服に出掛ける時だけだった。

柵の入口には門が設けられ、武装して矛を構えた兵たちが出入りする者を厳しく見張っている。

トヨ、アユメ、マユワを乗せた荷車が門にさしかかった。ウカシは兵に手形を見せた。兵が手をあげて合図すると、門が開いた。

広大な広場では、卓や椅子、松明の用意が、兵士に見張られた生口たちによってなされていた。

「今夜、月支（ウォルジ）、伯濟（ベクチエ）、斯廬（サロ）、狗耶（クヤ）、駕洛（カラク）の五つのクニの使節を招いた宴が開かれる。それまで汝等は、牢で待つ」

広場を抜けると、粗末な木の建物があった。建物は固く門を打たれ、兵たちが警備している。

三人の女たちは、そこに入れられた。

建物のなかには、二人の少女がうずくまっていた。白い貫頭衣に薄紅のスカート。頭髪をきちんと結っているが、ところどころにほつれが目立った。トヨが訊ねた。

「汝等は、どこのクニの者か」

少女の一人が、泣きぬれた瞳で顔をあげた。

「邪馬台の者」

「ヒミコは、邪馬台の乙女を生口として差し出すのか」

「吾等は罰を受けた。吾等はヒミコ様に使える宮女だった。吾等はヒミコ様の鏡を割った」

宮女たちは、それぞれクシハ（櫛葉）、ユズキ（柚杞）と名乗った。年はトヨと同じくらい。

宮女から突然奴隷の身分に落とされたのである。

彼女らの話を聞くうちに、ヒミコの暴虐は他のクニばかりではなく、邪馬台の内側でも人々を苦しめていることが分かった。微罪でも死刑、男は睾丸を串刺しにされ、女は乳房を切り取られ、死ぬまで棒杭に縛られ晒される。また年に一度、黒い布を頭からかぶり広場で祭事を催すが、そこで必ず暴虐を働く。妊婦の腹を割く。生きたまま人を焼けた鉄の柱を抱かせる。生きたまま大釜で人を煮て大官たちに食せしめる……。

語りながら二人の宮女たちはまたも声をあげて慟哭した。トヨは訊ねた。

「汝等はヒミコを憎むか」

宮女たちは顔をあげて激しく首を振った。

「ヒミコ様は神である。吾等はヒミコ様を畏れ敬う」

「このようなむごい仕打ちを受けてもか」

「ヒミコ様は神である」

「神ではない。人である」

二人の宮女は、はっとしたように顔をあげた。トヨは静かに続けた。

「良き王が邪馬台を治めれば、邪馬台の民は心安らかに暮らすことができる。邪馬台の民を苦しめ、他のクニの民を殺戮するヒミコは悪しき王である。邪馬台の民は、ヒミコを畏れるあまり、怒りを忘れている」

広場に巨大な天幕が張られた。その周囲を楯を並べたように兵たちが囲んでいる。

天幕の内部では、五つの卓が用意され、中央の丸い台をぐるりと囲むようにしつらえてあった。

それぞれの卓には、月支、伯濟、斯廬、狗耶、駕洛の五国の使節が着席し、使節の警護の兵が控えていた。

卓には山海の珍味や酒が並べられ、使節たちは早くも酒に酔い、わからぬ言葉でわめきあいながら、賑やかな楽の音に合わせて丸い台の上で踊る神女に見入っていた。

ヒミコは、この宴には姿を現していない。ヒミコは、戦の時以外は王宮の奥深く籠もっている。宴を仕切っているのは、邪馬台の大官ナシメ（難升米）であった。

「月支、伯濟、斯廬、狗耶、駕洛の方々よ」

踊りが終わり、拍手する五国の使節たちに、ナシメが呼びかけた。

「偉大なる女王ヒミコより、五国の方々へ献上する品を披露する」

ナシメが合図すると、ウシカに連れられたトヨ、アユメ、マユワ、クシハ、ユズキが入ってきた。五人とも麻の貫頭衣のみ。胸元を大きく開け、裾は短く、腕や脚が剥き出しだった。

半裸の美女の登場に、五人の使節は息を飲み、それから卑猥な笑みを浮かべた。

「まずは、この女」

ウカシがトヨの手を引き、台の上に乗せた。五国の使節たちは卓上に黄金や絹、玉などを並べた。もつとも高価な宝を並べた者が、台上の女を得る。

トヨを競り落としたのは、伯済の使節だった。アユメ、マユワ、クシハ、ユズキも、それぞれの使節の者と決まった。

ウカシは、五人を台の上に並べた。

「では、使節の方々。品物を持ち帰られよ」

五人の使節たちは卑猥な笑みを満面に浮かべ、涎を垂らしながら一人ずつ台に上り、それぞれが競り落とした女の腕をつかみ、台からおろして卓へと戻っていった。最後に、伯済の使節が、一人残ったトヨの腕をつかみ、臭い息を吐き、トヨには通じない言葉で囁きかけながら、頭から脚までしげしげとトヨを眺めた。それから、手をのばしてトヨの肩や胸に触れた。

歯を食いしばって耐えていたトヨは、伯済の使節が裾をまくって股間を指でまさぐったときに、怒りを爆発させた。

トヨは一声叫び、伯済の使節の股間を膝で蹴りあげた。伯済の使節は悲鳴をあげ、両手で股間を抑えた。トヨはその顎を蹴った。顎が砕け、口から血が噴き出した。顎を抑えて呻く伯済の使節の鞆丸を、トヨは左手で握りしめた。

伯済の兵が慌てて抜剣し、台に駆け上がった。トヨは最初にあがってきた兵の股間を蹴りあげ、使節の鞆丸を握りしめたまま兵が取り落とした剣を拾い、横に払った。兵の首が落ちた。さらに二人の兵を斬り倒した。伯済の使節は鞆丸を握り潰され、血反吐をはいて台から転げ落ちた。

他の使節たちは呆然と台上の椿事を見つめた。その隙を、アユメとマユワは見逃さなかった。

アユメは、月支の使節の鞆丸を蹴り潰し、マユワは駕洛の使節の鞆丸を握り潰した。アユメは月支の兵から剣を奪い、マユワは弓を奪った。

三人の女たちは、台の傍らに集まった。トヨとアユメは群がる五国の兵たちを次々と斬り伏せ、マユワは矢で射殺した。

「ユズキ！」

突然の戦闘におろおろするばかりの斯廬の使節に腕をつかまれていたクシハは、使節の股間に膝蹴りを浴びせ、ユズキに叫んだ。

「吾等も、彼等とともに戦おう」

ユズキは頷き、卓の酒瓶を振り上げ、狗耶の使節の顔を殴った。狗耶の使節は、鼻孔から血を噴きながらよろめいた。クシハが駆け寄り、後ろからその腰を蹴った。使節はたたらを踏みなが

ら、ユズキによりかかった。ユズキは、その股間をまさぐり、辜丸を探りあててつかんだ。

狗耶の使節は蛙の踏みつぶされたような悲鳴をあげ、醜く顔を歪ませた。ユズキは恐怖した。必死になって使節の辜丸を握りしめた。辜丸が潰れ、使節は血反吐をはいてぐったりとユズキにもたれた。ユズキは悲鳴をあげ、使節を突き飛ばそうとしたが、重くのしかかられ、仰向けに地面に倒れた。

そのユズキに、狗耶の兵が切りかかった。だが、兵は剣を振り上げたまま、硬直した。兵の首が落ちた。トヨが兵の背後から、首を斬り落としたのである。

「邪馬台の宮女たちよ」

トヨが叫んだ。

「吾等とともに来るか」

二人は同時に叫んだ。

「行く」

天幕の内部は血の海だった。斬殺された五国の兵たちの屍と、辜丸を潰されて半死半生の使節たちが無残な態をさらしていた。

大官のナシメはすでに逃げていた。ウカシとその仲間たちが、腰を抜き、後ずさって逃げようとしていた。

「ウカシよ」

トヨは、ウカシに言った。

「ヒミコの手先として人びとを害する卑劣な輩。汝は逃げられぬ」

ウカシは悲鳴をあげて立ち上がり、走りだそうとした。トヨはその背後から、股間を蹴りあげた。トヨは剣を構え、地に膝をつきうづくまるウシカの背中につきたてようとした。そのとき、ウカシの兵がトヨに斬りかかった。トヨは、二人の兵を真二つに切り裂いた。這いながら逃げようとするウカシを追うトヨの前に、天幕に飛び込んだ邪馬台の兵たちが群がった。兵たちは次々と血を噴いて倒れた。ウカシは股間を両手で押さえ、足をひきずりながらも必死で走り、姿を消した。

「柵まで走れ」

五人の女たちは天幕を出て、広場を突っ切った。途中、数名の兵が立ちはだかったが、ことごとく血煙をあげて転がった。

だが、柵の入口には、すでに数十名の兵が矛を構えて固めていた。後ろを振り向くと、背後にも数十の兵たち。兵たちのさらに後ろには、馬にまたがり、美々しい甲冑に身を固めた女が四人。

「ヒミコ……」

トヨが呟いた。はじめて眼にする邪馬台の女王だった。ヒミコは、三人の女兵を従え、冷たい眼でじっと五人の女たちを見つめていた。

マユワはそつと背の籠（えびら）に手を伸ばした。だが、矢はすでに尽きていた。

「トヨ」

アユメが言った。

「前にも敵。後ろにも敵。吾等は逃げられぬ」

「アユメ」

トヨが言った。

「吾は、ヒミコに斬りかかる。汝等は逃げよ」

アユメたちは驚いた。

「トヨ。汝は死ぬ気か」

「吾がヒミコに斬りかかる。邪馬台の兵たちは、女王を守るため、吾に襲いかかる。その隙に、クシハとユズキを連れて逃げよ」

「しかし……」

「ヒナは、そうやって吾を生かした。今は、吾が汝等を生かす」

言うなり、トヨはヒミコに向かって走り出した。ヒミコを守っていた兵も、柵を守っていた兵たちも、慌ててトヨに殺到した。

「行くぞ」

アユメは、他の三人の女たちを促し、手薄になった柵の門に向かって走った。残っていた兵を

斬り伏せ、外へと出た。

トヨは、群がる兵たちを斬り払い、ヒミコに向かっていった。

「殺すな！」

ヒミコが叫んだ。

トヨはさらに三人の兵を斬り、ヒミコに迫った。だが、三人の女兵が行く手を阻んだ。三人の女兵と斬り結ぶうちに、背後から群がる兵たちが、トヨの腕に脚に飛びつき、地に押し倒した。さらに数十の兵が折り重なった。

「昨夜、邪馬台で五人の女が、五国の使節とその兵を皆殺しにし、多くの邪馬台の兵を斬った。五人のうち一人は捕まったが、四人は逃げた」

辻の市場で、旅びとたちが噂しあっているのを耳にしたサヤは、激しく胸が痛むのを感じた。

……捕われたのは誰か。アユメか、マユワか、あるいは狗奴の王女か

無謀すぎる。五人ということは、仲間が二人加わったということだろう。だが、五人だけであの大国に攻め入るのは、死にいくも同じではないか。

サヤは自らに言い聞かせた。自分は間違っていないか。あるとき、一人、一行から離れたのは正しい判断だったのだ、と。

だが、いくらそう心のなかで繰り返しても、気が晴れなかった。自分一人で逃げたという罪悪

感だけが募った。

サヤは、邪馬台に向かって歩き出した。

山越えの道が、しだいに細くなつた。生い茂る樹々が陽光を遮り、夜のように暗くなつた。突然、悲鳴が聞こえてきた。サヤは、剣に手をかけ、腰を低く落として声の方に走つた。

林を抜けると、そこは泉だつた。二人の兵が血を流して倒れていた。毛皮を身に纏い、髪の手は伸び放題の少女が三人、剣を抜いて三人の兵と対峙していた。兵の背後には、身分の高そうな服を来た男が腰を抜かして震えていた。

十代の半ばにも満たぬ三人の少女に、髭面の兵たちは圧倒されていた。一人の兵が剣を振り上げて少女たちに飛び掛かつた。一人の少女が兵の剣を受け止め、脚をあげて股間を蹴つた。兵がうづくまつた。少女は兵の喉を掻き切つた。これを合図に、他の二人の少女によつて、残つた兵も斬られた。

腰を抜かしていた男が、立ち上がつて林に向かって逃げた。すると、林のなかから、もう一人の少女が現れた。少女は剣の柄で男の頭部を殴つた。男は昏倒した。

四人の少女たちはあげたげた笑いながら、男を取り囲んだ。一人の少女が、男の襟首をつかんで起こし、はがいて締めにした。一人の少女が、男の股間を蹴つた。男は悲鳴をあげて身を振つた。別の少女が、膝蹴りを浴びせた。男は泣き叫び、命乞いをした。もう一人が寧丸をつかんでひね

りあげた。男は血反吐をはき、失神した。

「もういい」

林のなかから、三人の女が現れた。同じような風体だが、年は二十歳をすぎているようだった。腕や首に巻いた装身具から、女たちの頭目格であることは見てとれた。四人の少女は、その場で剣を収め、跪いた。

さらに、林のなかから、六人ほどの少女が出てきた。少女たちは、大官たちが運んでいた木の箱に群がり、蓋を開けた。なかには、砂金や勾玉、珊瑚などが詰まっていた。少女たちは奇声を上げ、宝物を手掴みにして踊つた。

三人の女頭目たちは、満足げに笑みを浮かべた。

「邪馬台への献上品らしい」

「さっそく市へ運ばせよう」

茂みに隠れて一部始終を見守つていたサヤは、土蜘蛛だな、と心のなかで呟いた。

土蜘蛛は、つちごも、と読む。後の史書では土籠とも書く。山内に穴居していた一族である。五年前、ヒミコが女王の位について、まず行つたのは、蛮族と見なされた土蜘蛛征伐であつた。多くの土蜘蛛族が殺されたが、首領の一族である三人の姉妹が生き延びた。

三姉妹の名は、アザビ（阿邪美）、アケビ（阿毛美）、アラビ（阿蝸美）という。彼女たちは優れた女兵だつた。幼い宮女たちを連れ、山中で猛き兵に育て、略奪を働いた。勇猛で残忍、彼



女らによって、しばしば邪馬台への献上品を運ぶ諸国の使節の一行が、無残な屍で発見された。邪馬台やその属国の王たちは兵を出して征伐を試みたが、見つけ出すことは出来なかった。

かわり合いになると面倒だ。ここは逃げよう。

サヤがそつと腰を浮かしたとき、傍らの草が揺れ、音をたてた。

「誰か！」

長姉のアビザが叫んだ。土蜘蛛の少女たちが、いつせいにサヤに殺到した。

サヤが鞭を振るった。鞭は、真先に駆けた三人の土蜘蛛の少女の剣に巻きつき、その手から剣を奪った。サヤは、その少女の懐に飛び込み、膝で股間を蹴りあげた。少女は悲鳴をあげてうずくまった。サヤは、その喉元に鞭を巻き付け、怒鳴った。

「動くな！ この鞭には刃が仕込んである。吾が鞭を動かせば、この乙女の喉は裂ける」

土蜘蛛の少女たちは、立ちすくんだ。サヤは続けた。

「吾は汝等の味方である」

「味方？」

次姉のアケビが首を傾げた。

「味方である。吾も、ヒミコにクニを滅ぼされた。邪馬台を恨むこと、汝等と同じである。汝等は吾とともに邪馬台へ行き、ヒミコを滅ぼし、恨みを晴らす」

言い放つてからサヤは驚いた。三姉妹は哄笑した。

「汝は狂している」

狂しているかもしれぬ。サヤはそう思った。だが、意図せぬ言葉は次々と口から迸った。

「土蜘蛛族ともあろうものが、山賊の身に落ちぶれたか。吾はヒミコに滅ぼされた伊都の王族である。クニを滅ぼされても、王族としての誇りは捨てぬ。汝等は、土蜘蛛族の誇りを忘れたか」

土蜘蛛の女たちは、サヤに気押されて、囲みを作ったまま動かなかった。

「こうしよう」

サヤは提案した。

「汝等のなかから、武に秀でた者を選べ。そして吾と勝負せよ。吾が勝てば、吾とともにヒミコを滅ぼす。吾が負ければ、吾の五体を切り刻み、山の獣に喰わせよ」

三姉妹は目配せしあった。サヤの身のこなしから、人並みはずれて武術に秀でていることは見てとれた。討ち取るまでに、土蜘蛛の少女たちが何人斬られるか分からない。

「諾。吾が勝負する」

末妹のアラビが叫んだ。サヤは、人質にしていた少女を突き飛ばした。二人の土蜘蛛の少女たちが、股間を抑えて呻く少女を泉のほとりまで運び、介抱した。他の少女たちは、後ずさりし、大きく囲みを作った。

囲みのなかで、サヤはアラビと対峙した。サヤは鞭を捨てた。

「素手で勝負しよう」

アラビは頷き、剣を捨てた。

二人の女は、一定の間合いを保ち、相手の出方を伺った。

小柄だが、筋肉が発達し、太い腕や脚の持ち主であるアラビは低く腰を落とし、長い両手を前に突き出して、じりじりと横に足をずらしている。しなやかに背が高く、手足の細長いサヤは、背筋だけはびんと伸ばし、手足を緩く垂らして敵の攻撃に備えた。

アラビが奇声をあげて跳躍した。凄まじい高さに跳んだかと思つた瞬間、彼女の両脚がサヤの首に巻きついていった。

サヤは仰向けに倒れた。目にも止まらぬ敏捷な土蜘蛛の動きに不覚をとつた。アケビは太股をびったりと合わせ、サヤの首を締めつけた。土蜘蛛の少女たちがいつせいに歓声をあげた。

サヤは、脚をふりほどこうと、アラビの腿を叩いたりしたが、凄まじい力でびくとも動かない。

サヤは必死で頭を持ち上げた。かえって喉を締めつけられ呼吸が困難になるばかりだったが、他に手はない。アラビの腰が少しだけ浮いた。

サヤは、片腕をアラビの尻と地面の間に滑りこませ、指でアラビの陰部の敏感な襞をつかみ、ねじりあげた。急所を攻められ、アラビは悲鳴をあげた。太股の力が緩んだ。サヤは素早く、敵の太股の間から頭を抜いて立ち上がった。

アラビは、片手で股間を抑えながら、立ち上がった。その瞬間、サヤの脚が横薙ぎに跳んできた。サヤの膝頭が、アラビのみぞおちを蹴った。アラビは呻き、軀を前屈みにした。サヤは素早

く、アラビの乳房を蹴り上げた。アラビは悲しげに叫び、膝を落とした。サヤは容赦なく、アラビの顔面を蹴った。アラビは鼻孔から血を噴いて仰向けに倒れた。大きく開かれたアラビの股のつけ根を、サヤは爪先で蹴りつけた。

アラビは海老のように軀を折り曲げ、苦痛に悶えて地面を転がった。サヤは、アラビをうつ伏せに押さえつけ、右腕をねじあげた。ぐいと力をこめると、腕が肩からはずれた。アラビはまたも悲痛な叫び声をあげた。

サヤは立ち上がり、宣告した。

「汝はもはや戦えない」

アラビははずれた右肩を左手で抑え、悔しそうに額を何度も地面に打ちつけた。サヤは土蜘蛛の女たちを見渡して言った。

「汝等は吾とともにヒミコを滅ぼす」

そのとき、一陣の突風がサヤの肩先を襲った。サヤは危うく体をひねった。わずかに一筋の傷がサヤの肩に残った。アラビが、動ける左手で剣を拾ってサヤに切りかかったのだった。

「汝、吾を欺くか」

サヤはアラビの左腕を蹴った。剣が宙に舞い上がり、落ちて地面に突き立った。アラビは咆哮を發して剣に飛び掛かった。それより早く、サヤが剣を引き抜き、横に払った。アラビの両眼が切り裂かれた。

アラビは絶叫し、両眼を覆って膝をついた。サヤは、その頭部に剣を振り下ろした。アラビの眉間がざっくりと割れ、絶命した。

「アラビよ！」

アラビの二人の姉が同時に叫んだ。叫ぶと同時に剣を抜き、サヤに襲いかかった。サヤは真先に飛び掛かったアザビの股間を蹴った。アザビは呻いて膝をついた。サヤは、続いて襲いかかったアケビの懐に飛び込んだ。サヤの剣はアケビの腹部を貫き、切っ先が背中に抜けた。サヤは剣を引き抜き、アケビの鎖骨をめがけて振り下ろした。アケビの左の鎖骨が砕け、胸部を切り裂き、心の臓を二つに割った。

アザビは、両手で股間を抑え、うつ伏せに尻を突き出していた。サヤは、その尻に剣を突き刺した。切っ先は胃に達した。

アザビは呻き、痙攣した。しばし、硬直したまま激痛に耐えていたが、やがて口を開いた。

「汝、滅びし伊都の王女よ。汝の名は」

「サヤ」

「伊都の王女サヤよ、まことに邪馬台を滅ぼし、ヒミコを討つか」

「然り」

「ならば、汝に土蜘蛛の乙女たちを託す。土蜘蛛の乙女たちを率い、邪馬台を滅ぼせ」

アザビは顔をあげ、呆然と立ちすくむ土蜘蛛の少女たちを見やり、苦しい息の下から言葉を絞

り出した。

「汝等、土蜘蛛の乙女たちよ。伊都の王女サヤに従い、邪馬台を滅ぼせ」

土蜘蛛の少女たちは、剣を地に置いて跪いた。サヤは言った。

「吾は汝に代わり、土蜘蛛の乙女たちを率い、邪馬台を滅ぼし、殺された土蜘蛛たちの恨みを晴らす。土蜘蛛の乙女たちにクニを与え、良き男と娶せ、土蜘蛛の子等を産ましめ、地に満たす」

アザビの唇にかすかな笑みが浮かんだ。サヤは、瓜を切り裂くように、アザビの胴体を縦に二つに裂いた。